

# 中山間地域における移住者と受け入れ地域住民のニーズについての研究

## ～高知県・梶原町をモデルとして～

1180490 森 咲百合

高知工科大学マネジメント学部

### 1. 概要

近年日本の各地において、人口減少を原因とする地域衰退が、問題視されている。特に中山間地域で深刻化しており、高知県・梶原町では対策事業の一つとして「移住促進活動」を積極的に行っている。平成 26 年度から始まった当事業は、年々移住者の受け入れ数が伸びているが、その裏で、定住に結びつかなかったり、地域から孤立してしまったりする例も少なくない。そこで、本研究では、移住者-地域住民にアンケート調査を行い、移住政策に対する評価や移住者・地域住民双方の考え方を明らかにし、移住者と地域住民のニーズとギャップを見出す。

### 2. 背景

近年日本の各地において、少子高齢化や若者が都市部に流出することにより「人口減少」による過疎化問題が起きている。特に、中山間地域では人口減少がより深刻化してきており、地域コミュニティの維持困難や税収の減少による地方自治の行き詰まりなど大きな社会問題となっており、早急な対策が必要となってきている。しかし近年では、人々の間で田園回帰の動きが徐々に見られるようになってきた。これは、定住支援住宅の設置や教育、結婚に際しての各種補助など地方自治体が積極的に若年層に対する支援・補助を手厚く実施し始めたことが大きな要因となっている。しかし、現実的には「定住」に結びつけることが困難であり、「3 年以内」に転居する移住者が少なくないことや、移住後、実際に生活を始めてみたもののなかなか地域に溶け込めず、孤立してしまう例が多いことが問題視されており、移住者を如何に地域住民へと転化させていくかが課題となっている。

高知県の中山間地域である「梶原町」は移住政策に積極的に取り組んでいる。6 か月の定住お試し住宅制度や年 15000

円・10 年間借りられる定住支援住宅、教育支援制度など、県内各地と比較して充実した移住定住政策を展開しており、結果的に、これまでに平成 26 年から平成 28 年の 3 年間で約 120 人を迎え入れる成果につながっている。

しかし、梶原町における定住支援政策は始まったばかりであり、事業評価のための基礎資料の整備が望まれている。特に、移住者-地域住民が、政策に対する評価や移住者・地域住民双方の考え方（地域住民は果たして移住者を迎えることに肯定的であるのか、移住者に対してどのような思いを持っているのか）を明らかにする必要があると考える。

移住者と受け入れ側地域住民の互いへのニーズを明らかにすることで、移住者の定住につなげる手がかりと、双方がひとつの地域で豊かな生活を導きだす方法を探しだすことが可能となる。

### 3. 目的

本研究の目的は、高知県・梶原町を対象とし、移住者・受け入れ地域住民の相互間におけるニーズをアンケートおよびヒアリング調査により明らかにする。

### 4. 研究方法

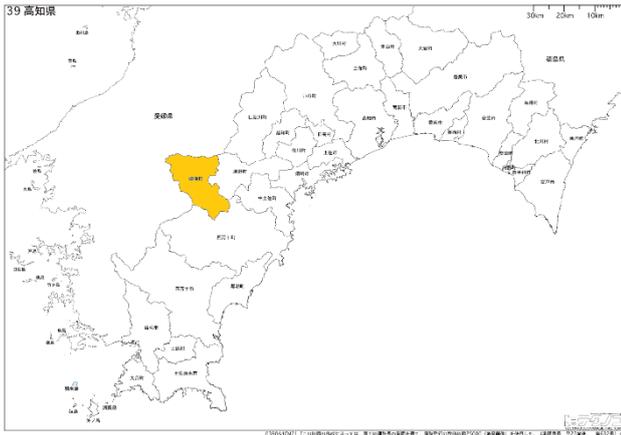
本研究は以下の手順で行う。

- ① 高知県・梶原町をフィールドとし、「移住者」と「地域住民」に対して、アンケート調査を実施し、移住者-地域住民が、政策に対する評価や移住者・地域住民双方の考え方を把握する。
- ② アンケート結果から得られた「移住者」「地域住民」の傾向をまとめ、分析し、移住者と受け入れ側地域住民の互いへのニーズを明らかにする。

## 5. 梶原町の移住政策

### 5-1 梶原町の概要

梶原町は、高知県高岡郡に属し、町面積の91%を森林が占め、日本三大カルストである「四国カルスト」に抱かれた自然豊かな山間の町である。人口は(平成30年1月現在)3,404人、2015年の総人口に占める65歳以上の割合(高齢化率)は42.3%の過疎化市町村である。



(図1 梶原町の位置)



(図2 梶原町6区の地図・位置関係)

### 5-2 梶原町での移住定住の現状

梶原町における移住定住政策の現状について、ヒアリング調査により整理した。

梶原町では、人口減少が進んでおり、過疎化や少子高齢化が進み、限界集落化も懸念される。このため梶原町では、平成26年度から町役場を中心とした移住促進活動を開始した。

梶原町では、平成26年度から平成28年度の3年間で、合計58戸、120人(うち未成年者33人)の移住者を受け入れている(表1)。

また、町内の空き家戸数は200戸であり、そのうち3年間で改修した空き家は38戸である(表2)。空き家改修個数は、年々増加傾向にある(表3)。

表1 梶原町 移住者 集計表

項目	県内	県外	計
空き家活用住宅	17戸	17戸	34戸
	47人	37人	84人
	(18人)	(8人)	(26人)
飯母移住定住 促進住宅	5戸	1戸	6戸
	5人	4人	9人
	(0人)	(3人)	(3人)
竹の藪クラフト	2戸	2戸	4戸
	2人	2人	4人
	(0人)	(0人)	(0人)
紹介住宅	2戸	6戸	8戸
	3人	6人	9人
	(0人)	(0人)	(0人)
町営住宅	0戸	1戸	1戸
	0人	1人	1人
	(0人)	(0人)	(0人)
合計 58戸 120人 (うち未成年者33人)			
平均年齢(大人) 38.1歳			

(平成29年3月31日現在)

表2 梶原町内空き家実態調査 集計表

区名	空き家 件数	うち 改修済件数	うち 売却済件数
越知面区	50	11	2
四万川区	38	4	0
初瀬区	11	0	0
東区	46	9	1
西区	30	14	0
松原区	25	0	0
<b>合計</b>	<b>200</b>	<b>38</b>	<b>3</b>

(平成26年4月～平成29年3月現在)

表3 年度別空き家改修個数 集計表

年度	整備数	備考
H25	3戸	内お試し住宅1戸
H26	11戸	内お試し住宅1戸
H27	15戸	—
H28	15戸	—
<b>合計</b>	<b>38戸</b>	<b>内お試し住宅2戸</b>

(平成29年3月31日現在)

### 5-3 移住・定住コーディネーターの設置

梶原町では「移住定住コーディネーター」を設置しており、移住を希望する人と地域の間立つ窓口となって、移住に関する話を進めていく。移住希望者と同じ目線に立ち、住居や職場の選定、質問の対応など、細やかなニーズを聞き入れ、地域の特性とマッチングを考慮し、移住希望者と地域にとってより良い移住を提案、実践している。

### 5-4 定住支援住宅

梶原町での独自の取り組みとして、力を注いでいるのが「定住支援住宅」の整備である。この活動も移住促進事業と同じく平成26年度から開始された。この事業は、大きく分けて2つのタイプに分けられる。

一つ目は、最大6か月間の「定住お試し住宅制度」である。生活家電、食器類を備えたお試し滞在用の住宅で、布団のみの持ち込みで生活することが可能である。賃料は、月10,000

円で、賃貸期間は1か月以上6か月未満となっている。移住を考える過程で、体一つで実際に町での生活を体験可能にする画期的な住宅制度である。

二つ目は、「空き家改修事業」である。町内の住む人が居なくなり、管理の行き届かなくなった空き家を、町が10年単位で持ち主から借り上げ、補助金でリノベーションを行い、移住者に賃貸として提供する事業である。賃料は、月15,000円とリーズナブルな価格で新築同様に生まれ変わった住居に住むことができる。

そのほかにも、「飯母移住定住促進住宅」「竹の藪クラフト(移住定住雇用促進住宅)」「紹介住宅(現状の空き家)」等がある。(表1)

定住支援住宅は、毎年一定戸数の改修が行われており、町内の空き家は現在約200戸とされているが、平成25年度から平成28年度までの4年間で、38戸の改修を完了し、実際に定住支援住宅として移住者が居住している。移住において、いちばん重要視されるポイントは住まいの確保である。その点において、梶原町の定住支援住宅制度は、移住者にとって魅力的な支援制度であると考えられる。事実、定住支援住宅への入居は常に定員に達している状態であり、実際に、梶原町への移住を考え視察に訪れた人が、定住支援住宅への改修中の住居を見学したところ、完成に満たないにも関わらず、移住を決めたという例も存在する。それほどまでに、梶原町の行う定住支援住宅に対する移住者の需要は高いことがわかる。

### 5-5 梶原町独自の支援体制

梶原町は、福祉、医療、教育、就職、住まい等の面において、独自の支援体制を展開している。

「保育料・給食費の無料化」、「通学のための交通機関無料」、「中学卒業までの医療費無料」といった、充実した子育て支援を受けられるほか、「町産材活用促進事業補助金」といった家づくりを支援する補助金や、「ホームヘルパー2級養成講座を無料で受講可能」等の人づくりに関する支援も行っている。

## 6. アンケートによる移住者・受け入れ側 双方のニーズ調査

本研究は、アンケート調査を用いて調査を行う。調査方法は、以下のとおりである。



(図3 調査モデル)

- ① 梶原町における「移住者側」「受け入れ側」にそれぞれ異なる内容のアンケートを作成、配布する。
- ② 回収したアンケートを「移住者側」では、「世帯別による差」「年齢による差」について、「受け入れ側」では「地域別による差」「現状の受け入れ状況」にそれぞれ着目し、回答内容の分析を行う。
- ③ 「移住側」と「受け入れ側」それぞれのアンケートで顕著になった優位性を見出し、擦り合わせを行い、双方のニーズとギャップの抽出を行い、明らかにする。

### 移住者側アンケートの概要

実施日	2017年1月中旬
実施方法	アンケート用紙配布
対象者	3年以内に梶原町に移住した家族の代表者
回収方法	移住コーディネーターによる回収
回答数	12

### 受け入れ側アンケートの概要

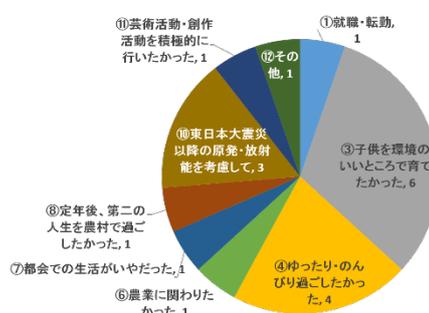
実施日	2017年11月下旬～12月上旬
実施方法	アンケート用紙配布
対象者	梶原町各区長、集落長（全55名）
回収方法	郵送、移住コーディネーターによる回収
回答数	38

## 7. アンケート結果

### 7-1 移住側の回答

移住者側のアンケート結果を見ると、梶原町を構成する6区の中でも梶原町北部に位置する「初瀬区」「松原区」の回答が少なかった。また「20～40代」の若い世代が全体の3分の2を占めており、なかでも、半数が「40代」であることがわかる。住居については、大半の移住者が「定住支援住宅」に居住していることがわかる。

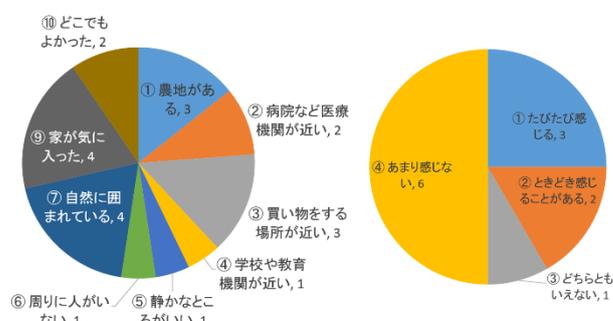
#### ① 居住地選定理由



(図4 居住地選定理由)

移住の理由については、子育ての目的で移住をした人の割合が最も高い結果となった。移住理由については、「ゆっくり・のんびり過ごしたかった」、「農業に関わりたかった」、「定年後第2の人生を農村で過ごしたかった」の回答が多く、田舎での生活を求めて移住した人も多いことがわかる。

#### ② 居住地選定理由と“生活面”において不便さを感じる頻度



(図5 居住地選定理由と“生活面”において不便さを感じる頻度)

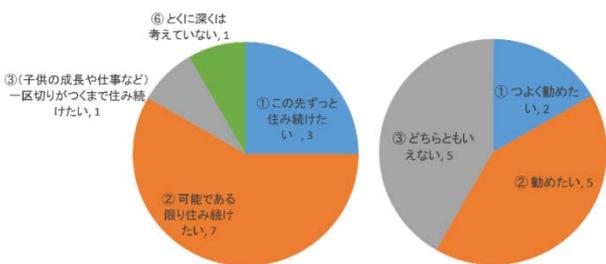
移住地選定理由については、「自然に囲まれている」「家気に入った」の梶原町の自然環境や定住支援政策を肯定的にとらえる回答数が多かった。さらに、「病院など医療機関が近い」「買い物をする場所が近い」「学校や教育機関が近い」の「便利さ」を表す項目と、「農地がある」「静かなところがいい」「自然に囲まれている」の「田舎特有」を表す項目では、後者の回答数の方が多いことが分かった。

移住者が移住後に生活面において不自由を感じるかどうかを質問したところ、「あまり感じない」、「感じない」の回答が多数を占めている。

自分自身を“地域の一員である”と感じているかと質問したところ、半数以上が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した。

「地域住民とのコミュニケーションをとる頻度」を問うと、ほとんどの移住者が「ほぼ毎日」と回答し、他の回答も「1週間に1回程度」とかなり密接なコミュニケーションをとっていることがわかった。また、「地域行事への参加頻度」を問う設問では、すべての回答者が地域行事に参加しており、そのうち半数は「積極的に参加している」と回答し、「参加をしていない」の回答はないことがわかる。

### ③ どのくらいの期間梶原町に住み続けたいかと移住希望者に梶原町を勧めたいと思うか



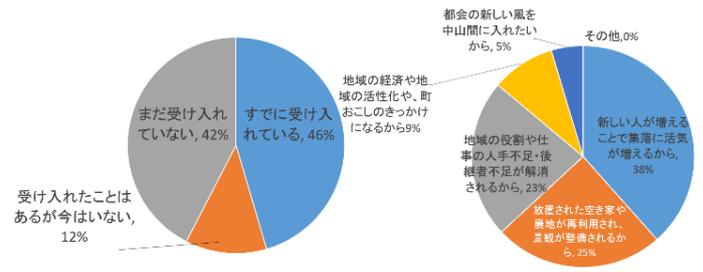
(図6 どのくらいの期間梶原町に住み続けたいかと移住希望者に梶原町を勧めたいと思うか)

「どのくらいの期間梶原町に住み続けたいか」という質問に対しては、「この先ずっと住み続けたい」「可能である限り住み続けたい」の回答が全体の4分の3以上となった。また、「身の回りに移住を希望する人がいれば、梶原町への移

住を勧めたいと思うか」の問に対しては、半数以上の回答者が「進めたい」と思っていることがわかった。この2つの質問から、移住者の梶原町に対する移住政策の評価は高いことがうかがえる。

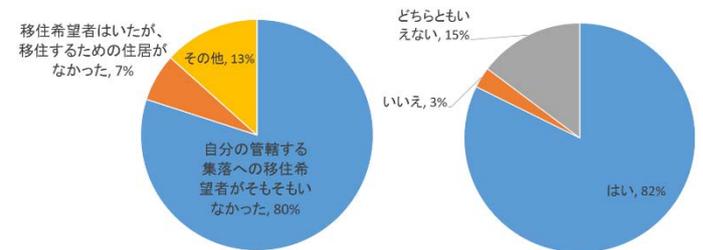
### 7-2 受け入れ側の回答

#### ① 移住者の受け入れ状況とその理由



(図7 移住者の受け入れ状況とその理由)

#### ② 移住者を受け入れていない理由と今後も移住者を受け入れたいと思うか



(図8 移住者を受け入れていない理由と今後も移住者を受け入れたいと思うか)

地域側の移住者に関するアンケート結果を見てみる。はじめに、移住者を実際に地域に受け入れているかどうかを尋ねたところ、初瀬区以外の5区全ての地区で「すでに受け入れている」と回答し、そのうち、東区では、飯母、川西路、神在居、川口集落。四万川区では、中の川、六丁、下組集落。西区では、宮野々、広野、仲間、下西の川集落。松原区では、松原集落に、受け入れ実績があるとの回答であった。しかし、まだ「まだ受け入れていない」の回答は、初瀬区では4集落、東区では4集落。四万川区、松原区ではそれ

ぞれ1集落と、移住に積極的とそうでないのに分かれている。特に、移住者を積極的に受け入れている区は、東区と西区で、各4名の移住者を受け入れている。

地域住民は、移住者に対して「地域に活気を増やす」「過疎化、人手不足を解消する」ことを移住者に求めていることがわかる。

移住者を受け入れていない理由については、その集落自体への移住希望者がいなかったことが主であることがわかる。また、「(今後も)移住者を受け入れたいと思うか」の質問に対しては、8割の回答者が肯定的であることがわかる。

## 8. 考察

### 8-1 移住者側が求めるニーズ

(1) アンケート結果から、移住理由についての回答を「子供のいる世帯」「子供のいない世帯」に分け、さらに「子供のいない世帯」を「40代以下」「60代以上」に分類し、比較を行った。その結果、「40代以下」は半数が子育てを、「60代以上」は定年後の田舎暮らしを目的に移住していることがわかる。

(2) アンケート結果から、移住者は地域住民とのコミュニケーションの頻度を積極的に行っていることがわかった。このことから、移住者は地域と密接に関わりたい、地域住民とふれあいたいという思いを持っている傾向にあると考えられる。考えられる理由としては、移住前の相談の段階で、移住定住コーディネーターが地域に溶け込もうとする意識の強い人を積極的に呼び込んでいることが挙げられる。そのため、自分自身を「地域の一員である」と自覚を持つ人も多いのではないかと考えられる。

(3) 梶原町の移住政策について、移住者はおおむね満足していることがわかる。半数以上の回答者が「住み続けたい」「他人にも教えてあげたい」と思っており、理由としては、定住支援住宅の設置や、子育て支援などといった政策に対して、好評を得ていることが考えられる。

(4) アンケート結果から、移住者の考える「環境の良さ」を

推測する。

まず、居住区の選定理由から見ると、「家が気に入った」「自然に囲まれていたから」が最も回答数が高い。次に「病院などの医療機関が近い」「買い物をする場所が近い」「学校などの教育機関が近い」などの便利さを求める回答、続いて「農地があるから」「静かなところがいい」「周りに人がいない」など自然環境を求める意見が見られた。ここから移住者は、便利さよりも重視するのは「住まい」「自然環境」であると考えられる。

移住者の受け入れ状況を見ると、地区ごとに差があることが明確である。特に、梶原町南部に位置する初瀬区、松原区への移住者は少ない。南部地域は、中心街からの交通アクセスが悪いことや、地域の衰退が進行していることもあり、中心街や北部と比較すると、定住支援住宅などの住まいの整備も消極的である。しかし、アンケート結果から移住者のニーズは「住まい」「自然環境」を重視する傾向があり、南部地域の環境を否定するものではなく、寧ろ積極的に移住政策を進行させることで、地域差なく移住を受け入れることが可能になるのではないかと考えられる。

### 8-2 受け入れ側が求めるニーズ

#### ① 移住者の受け入れの有無

(1) はじめに、移住者受け入れの有無によるニーズの比較を行った。その結果、移住者をすでに受け入れている地域は引き続き受け入れることに肯定的な意見が見られたが、受け入れていない地域は受け入れに慎重な意見も見られた。これは、移住者が地域住民と比較的良好な関係を構築していることを示しており、梶原町の移住政策が正常に機能していることを意味している。これに対し、受け入れていない地域に対する懸念は、現状の地域コミュニティに対する攪乱要因の一つとして移住者をとらえているものと考えられる。よって、まだ受け入れていない地域においては、移住政策の概要を地域住民に説明するとともに、受け入れている事例を紹介することで、不安感を軽減していくことが望まれる。

(2) 移住者の受け入れ有無で回答者を分け、分析すると「受け入れている」と「以前受け入れていた」では「放置されて

いた空き家や農地が再利用され、景観が整備されるから」の回答の割合が多いことがわかる。このことから、実際に移住者を受け入れたことで地域の景観整備を実感していると考えられる。また、「受け入れていない」では、「地域の経済や地域の活性化、町おこしのきっかけになるから」の回答が比較的多く見られた。移住者を受け入れていない地域は、中心街から遠い地域に多い傾向にあることから、地域としての活力が低下しており、そのため地域おこしを求めていると考えられる。

## ② 地域別

(1) 次に、梶原町の地理的特性を考慮して、構成する6区を特徴ごとに北部（越知面、四万川、西）、中心部（東）、南部（初瀬、松原）の3地域に分類して、それぞれの特徴を詳細に分析した結果、「北部」「中心街」「南部」によって、移住者に求める人物像のタイプに差が見られる。

### ■ 「北部」

「革新的な人」「自分の意見がある人」「リーダーシップのある人」を求めている傾向が示された。

北部は中心部から交通アクセスが良い反面山岳地に属しており、考え方も中山間地域特有の閉鎖的思考「受け身で変化を好まない性質」を持つ傾向が考えられたが、アンケート結果ではそれとは反対の性質が選ばれている。これは、梶原町北部地域は、坂本龍馬の土佐藩脱藩の際比較的協力している世帯が多く、開明的、革新的な人物を好む傾向があることが理由として考えられる。

### ■ 「中心部」

梶原中心部の移住者に求める傾向としては、「穏やかな人」「社交性のある人」「元気な人」である。

中心部は、学校や町役場、病院など行政やコミュニティーの核となる施設が集約している。よって、他の地区と比較してイベントが多いのみならず、外部からの観光客との接触の機会が多い特徴がある。このように、人と人との距離が近いため、移住者にも「協調性」を重視している傾向にあると考えられる。

### ■ 「南部」

南部地域が移住者に求める傾向としては、「自然が好きな人」「自立できる人」「中山間での生活をしたことがある人」が好

まれる傾向にある。

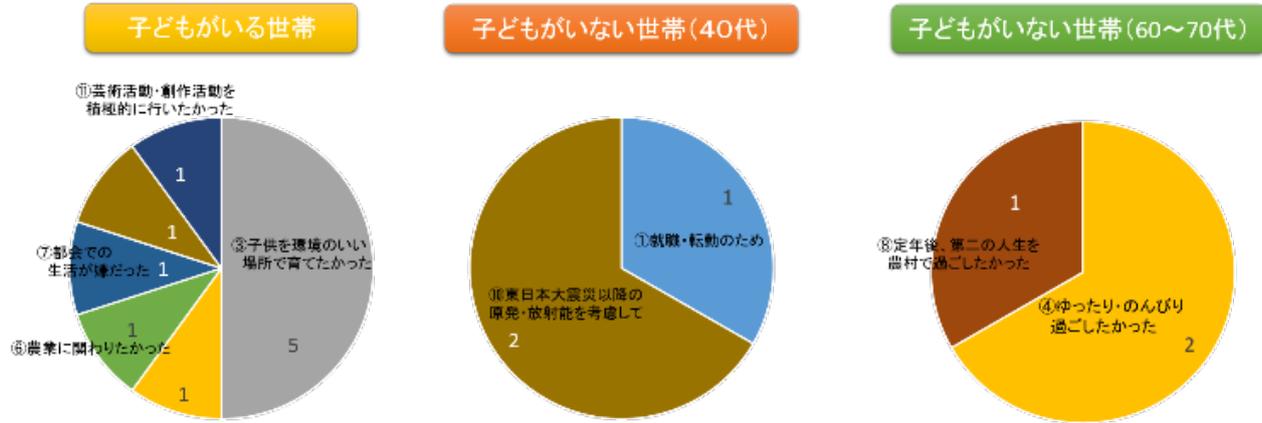
梶原町南部地域は、梶原町中心部から交通アクセスが悪く、中心部より距離があるため生活上での不便さが目立つ。このため、南部地域の住民は、食事のやり取りや共同作業など地域内でサービスを共有している事例が多くみられるが、その柱になるのは地域の“若い”世代（50代）である。また、南部地域は久保谷複層林や八百とどろなど北部・中部と比較して多様な自然環境を有しており、南部町民もそれを誇りに思っている。以上のことから、求められる人物像は「不便な住環境に一定の免疫がある人」「自立性のある人」が支持されたのではないかと考えられる。

(2) 移住者に望む属性別での質問では、どの地域でも一括して「若者」に対するニーズが非常に高いことがわかる。

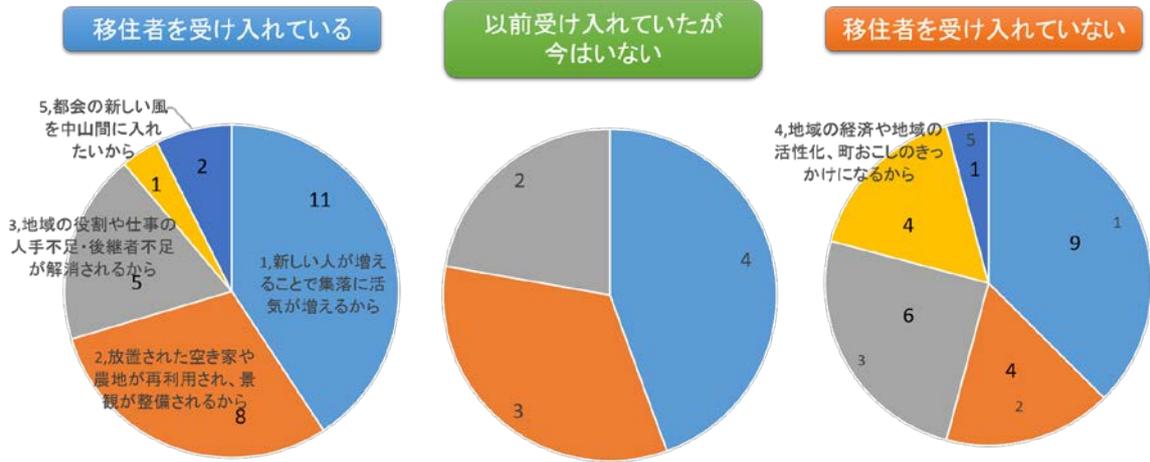
職業別に、地域ごとのニーズがあるのか着目したところ、各地域で活発な産業に対して、回答数が多い傾向に見られた。「農業従事者」「林業従事者」等の共通項も見られたが、特に中心部では「地域おこし協力隊」「学生」「医療従事者」、南部では「土木関係者」に回答数が多くみられ、このことから、地域ごとの産業の次世代の担い手を欲していると考えられる。

(3) 「移住者に望む役割」では、南部、北部、中心部の順に「地域の行事に積極的に参加してもらいたい」「近所づきあいを大切にし、集落の会や冠婚葬祭のお手伝いをしてほしい」「ゆくゆくは地域の責任のある役割や伝統を引き継げるようなリーダーのような存在になってほしい」を合計した割合が多くなっていることがわかる。これらの回答は、いずれも人手不足や後継者不足に関するもので、過疎化が進行している南部地域に最もその傾向が強く表れていることがわかる。地域の過疎化や高齢化が進行し、50代を“若者”と呼ぶ南部地域では特にこの問題が重要視されていると考えられる。

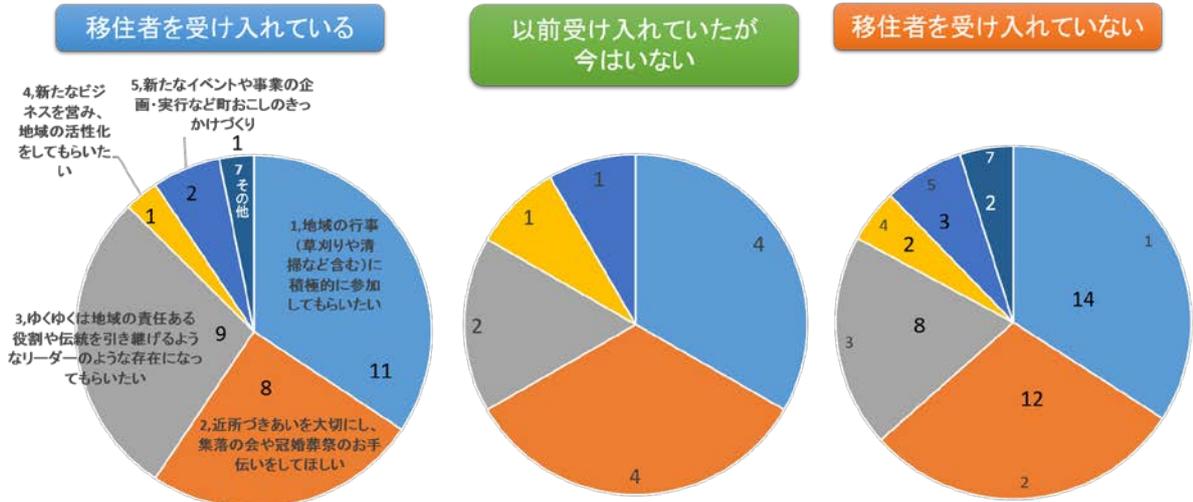
「移住者を受け入れたい理由」に着目すると、北部、南部では「新しい人が増えることで集落に活気が増えるから」の回答が半数程度の割合を占めたのに対し、中心街では4分の1程度であることがわかる。中心街は、住民も多く、人の出入りも多いことから活気づいており、それほどまでに重要視されていないことが考えられる。



(図9 世代別「移住理由」)



(図10 受入れ有無別「移住者を受け入れたい理由」)



(図11 受入れ有無別「移住者に望む役割」)



(図 12 地域別「移住者を受け入れたい理由」)



(図 13 地域別「地域の一員として望む役割」)

## 9. 提案

以上の結論から、梶原町の移住定住政策に次のことを提案する。

### (1) 梶原町南部地域への定住支援住宅設置の促進

先に述べたように、現状では中心街、北部に移住政策が展開されているが、南部地域では遅れをとっている。中心街からの距離が離れていることから、不便さが問題視される南部地域であるが、移住者は梶原町独自の自然環境や移住政策、福祉事業にニーズが高く、不便さを拒絶するような回答も見られなかったことから、南部地域での定住支援住宅の設置を提案する。移住者の居住地選定理由として、定住支援住宅に魅力を感じている声が多かったことから、南部地域にも定住支援住宅を設置することで、地域差のない移住につながるのではないかと推測する。

### (2) 移住者と地域住民のコミュニケーションの場の設置

移住者は、地域住民とのコミュニケーションを取ることに意欲的であることに対し、アンケート結果より移住前と移住後のギャップを感じることはあるかという質問で「ある」と回答した内容は「行政と地域住民の受け入れ態勢に温度差を感じる」「地域住民がもっとあたたかい雰囲気を迎えてくれるかと思ったがそうではなかった」等のコメントがあった。

平成 27 年度に梶原町役場主催で行われた若者移住定住促進会議では、移住者の定住について話し合われた。話し合いの中で「青年サークル」の設置が望まれた。これは、地域の 20～40 代が集まり、地域の行事やイベントを企画・実施・補助する団体である。従来、同様に青年団という団体も存在しているが、時の経過と人の過疎化により継続力が弱まり、団体としての力も失われつつある。そこに移住者も加わることで、コミュニケーションの輪が広がるだけでなく、地域の諸問題について、元々の地域住民の視点のみならず、移住者の様々な視点からの意見も交え、クリアに話し合うことが可能となる。その結果、ふれあいの場の提供だけではなく、行政と地域をつなぐ架け橋となり得るのではないかと考えられる。

### (3) 移住政策、移住者受入れの現状について、受け入れ地域

の住民を対象とした説明会の開催

移住者を受け入れていない地域は、すでに受け入れている地域と比較し、地域としての活力が弱いのか、より地域おこしを求めている傾向にある。移住者の受け入れのない地域は、移住者を受け入れることに地域コミュニティが錯乱する不安を抱いており、これを取り除く必要がある。また移住政策に対して、正しい知識を得ないままに誤解や誤認をし、否定的な思いを抱いてしまう恐れもあることから、地域住民に対する移住政策や移住者についての説明会を開くことを提案する。説明会では、移住政策の目的や政策の内容、これまでの成果、現状、そして移住政策には地域住民の協力が不可欠なことを入念に説明し、移住政策に関する一定の知識を身に付けてもらい、平等な目線から受け入れを促進することを可能にすることを目的とする。また一度限りの開催ではなく、定期的に報告を行うことで、集落の代表者だけに限らず、地域住民全体で移住政策に対する当事者意識を統一することにもつながるのではないかと考える。

### (4) 移住・定住コーディネーターの後継者育成

梶原町の移住政策の発展の理由のひとつに、移住・定住コーディネーターの設置が大きく関係していることは明らかである。移住を考える人と一対一で向き合い、悩みや相談、ニーズを聞き入れ、移住までのサポートを行い、さらに移住後のトラブルの対処まで、細かく対応する姿勢が移住者の厚い信頼につながっている。その効果もあり、移住者は年々増加している。しかし、現状として移住・定住コーディネーターは、1 人のみでこの対応すべてを行っているため、日々、様々な要望やトラブルに 1 人で対応しており、相当な負荷が掛かっているのではないかと推測する。移住・定住コーディネーターは、町全体、地区ごとの特性や特徴、詳細な情報を把握する必要があるのも勿論のこと、様々な人とのネットワークを繋げる必要があるため、知識と人望が必要な仕事であるといえる。これらを実現するとなると、内容の引継ぎ等に膨大な時間がかかると想定される。これらの点を考えると、移住・定住コーディネーターの後継者育成を迅速に実施し、これからの移住政策の展開にスムーズに対応できるように備える必要があると考えられる。

## 10. 結論

本研究では、移住者側・地域住民側のアンケート結果を通じて、双方のニーズの特徴について分析した。その結果、以下の事項が明らかとなった。

### ■ 移住者の傾向

以上のことから、移住者の傾向として次のことが挙げられる。

移住者のほとんどは、中心街・北部に居住しており、移住の理由については、様々な理由が挙げられているが、年代別に見ると、20～40代の世代は子育てを、60代以上の高齢世代は、定年後の田舎暮らしを目的としている傾向が捉えられた。また、居住区の選定については、定住支援住宅を気に入った、自然に囲まれているところが良い等の意見が多かった。

田舎特有の密接なコミュニケーションに対しても肯定的に捉えており、日常のふれあいの頻度も多く、地域行事への参加率も高い。それゆえに、疎外感を感じておらず、自らを地域の一員として自覚を持っている人が多いことがわかった。

### ■ 受け入れ地域が求めている人

受け入れ地域の求める移住者へのニーズとして次のことが明らかとなった。

移住者を受け入れている地域では、引き続き受け入れることに肯定的な意見が多く見られたが、受け入れている地域では、移住者に対して不安を抱いている傾向にある。

中心街では、協調性・コミュニケーション力を移住者にも重視している傾向にあると考えられる。

また、職業では学生、医療従事者、地位おこし協力隊等を望んでいる。

北部では、坂本龍馬の土佐藩脱藩の際比較的協力している世帯が多く、中山間独特の閉鎖的な思考ではなく開明的、革新的な人物を好む傾向があることがわかる。このことから、北部地域では新しいことを始める際に前向きな姿勢があるのではないかと考えられる。

最後に南部では、他地域と比べると、急速な過疎化が進行しているため、深刻な人手不足に悩まされていることが明らかとなった。そのため、現在進行形で直面している諸問題を解決することが求められている。不便さが目立つ南部地域で

は、不便な住環境に一定の免疫がある人、自立性のある人が求められている。職業に関しては土木関係者を望んでいることがわかった。

## 11. 謝辞

この研究を卒業論文として形にすることが出来たのは、梶原町の住民の皆さまが貴重な時間を割いてアンケート調査に協力していただいた結果と、親身に調査に協力いただいた梶原町役場・片岡幸作さんのおかげです。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。そして、本研究を進めるにあたり、ご指導を頂いた卒業論文指導教員の馬淵泰先生に感謝致します。また、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた馬淵研究室の皆様に感謝します。

## 12. 引用・参考文献

- 1 雲の上の町ゆすはら—高知県梶原町—(最終閲覧日:2018年2月16日)  
<http://www.town.yusuhara.kochi.jp/town/>
- 2 「移住」・「定住」応援ブック『ゆすはら暮らふと』
- 3 移住・定住・報告書 平成26・27・28年度[三か年]  
— 移住・定住コーディネーター 片岡幸作 作
- 4 テクノコ白地図イラスト <http://technocco.jp/> (最終閲覧日2018年2月16日)